

左京六・七条二坊の調査

—第113次

1 はじめに

本調査は、農林水産省近畿農政局による、平成12年度(2000年度)大和平野農地防災事業の一つとして計画された、高所寺池堤防改修工事にともなう事前調査として実施した。

当初は、堤防内周の遺構面残存状況を確認する目的で、幅3mほどのトレンチを池内の8カ所に設けて発掘調査する計画だった。その後、池内周に工事用仮設道路を施工する計画に変更となり、その路線敷の8カ所に、あわせて約1300㎡の調査区を設定して調査に着手した。

ところが、調査着手後、計画が再度変更となり、池の南側堤防と東側堤防南半部について工事用道路を造成し、堤防本体の擁壁を改修することとなった。そこで、施工範囲については調査範囲を拡大し、この主調査区に推定される六条大路と東二坊坊間路の確認、および藤原京左京七条二坊西北坪での遺構検出を目的とした。また、本年度施工範囲以外については、遺構面の残存状況を確認するため、東側と北側の堤に各1カ所(東トレンチと北トレンチ)、西側の堤に3カ所のトレンチ(西Ⅰ～Ⅲトレンチ)を設定して発掘調査した(図76)。

最終的な調査面積は、合計2080㎡。調査は、2001年1月9日に開始し、4月5日に完了した。

2 検出遺構

主調査区・東トレンチ 藤原京期ないし直前期の遺構、鎌倉時代の遺構、そして古墳時代およびそれ以前の遺構などを確認した(図77)。

藤原京の条坊関係遺構としては、六条大路と東二坊坊間路を検出した。

六条大路SF2910は、主調査区の中央やや北寄りで、素掘りの南北両側溝を確認した。北側溝SD2915は、幅2.3m、深さ0.8mあり、下層は砂と粘土が互層をなす流水堆積層。土器片が出土したが、大半は古墳時代のものだった。南側溝SD2909は、断面で幅2m、深さ0.35mの規模。北側溝よりかなり浅い。

調査区東辺での南北両側溝の溝心の座標を求めると、北側溝SD2915は $X = -167,085.6$ 、南側溝SD2909は

$X = -167,101.8$ 。したがって、両側溝の心々間距離は16.2m、路面幅はおよそ14mとなる。

東二坊坊間路SD6030は、調査区の南半で素掘りの東西両側溝を検出し、主調査区の北端と東トレンチでは東側溝だけを検出した。

主調査区の南半で確認した東側溝SD6031は、幅0.6～0.8m、深さ0.15～0.2mほどの規模。六条大路との交差点付近から北は、池の浸食などによる削平をこうむっており、残っていなかった。主調査区北端で池の汀線からはずれた部分では、残存状態が良好だった。このあたりでは、幅1.6m、深さ0.5mと規模が大きく、下層には流水堆積が、上層には埋立土があった。堆積土層から土器や瓦片などが出土した。主調査区北端部では、西側溝は削平されていて検出できなかった。

主調査区南半での西側溝は新旧2条あった。東側にあるSD6032Bが新しい。SD6032B(西側溝・新)は、最大幅1.6m、最も深い部分で0.8mある。深い部分では下層に流水堆積があり、多量の土器が出土した。なかに「大鳥評」と銘書きした須恵器杯B蓋がある(図78)。

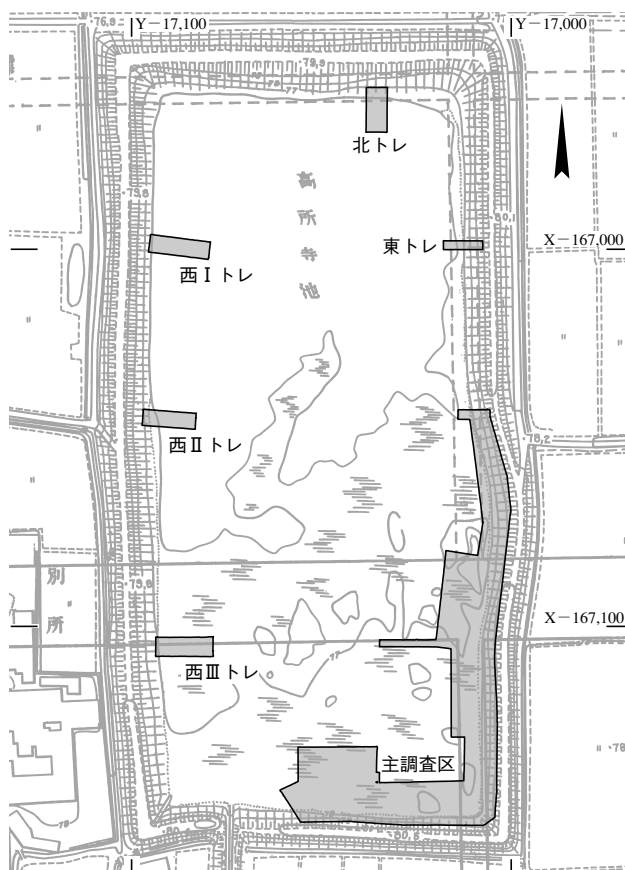


図76 第113次調査位置図 1:2000

西側のSD6032A(西側溝・古)は幅1.1m、深さ0.3m。こちらからはほとんど遺物が出土しなかった。

X = -167,124.0ラインでの溝心の座標は、東側溝SD6031がY = -17,005.7、SD6032BがY = -17,012.6、SD6032AがY = -17,013.8。したがって、当初の東二坊坊間路の側溝心々間距離は8.1m、西側溝付け替え後が6.9mとなる。

六条大路の南、東二坊坊間路の西側が藤原京左京七条二坊西北坪にあたる。この坪内では、古代の遺構として、東西溝1条、井戸1基、掘立柱堀1条、掘立柱建物1棟を確認した。

東西溝SD9323は、調査区の南辺に平行しており、北の溝肩だけを検出した。南肩は調査区外にあるため、幅は不明。深さ0.4~0.5mほどの素掘溝。溝の位置が、六条大路心から南へ約60m、六条大路南側溝からは52mほどの距離にあり、この坪を南北に二分する区画溝の可能性がある。7世紀後半から藤原宮期にかけての、比較的多量の土器と瓦が出土した。

井戸SE9330は、この東西溝の北約9m、東二坊坊間路西側溝からは西10mほどのところにある。横板組五角形の井戸。掘形上面の直径約2.5m、検出面から井戸底まで2m。井戸枠3段が残っていた。最下段の井戸枠5枚はほぼ完全に残り、両方の側辺を凸字形に加工した枠板2枚、逆に側辺を凹字形に加工した枠板2枚、そして一方を凸字形、片方を凹字形に加工した枠板1枚の、計5枚で構成されている。相欠きになる側辺を組み合わせ、隅木は使わない。枠板の大きさは全長103~106cm、高さ62~63.5cm。下から2段目の枠板は、高さ48~51cmを測る。井戸底には拳大ほどの石を敷き詰める。

埋土および埋立土から、土器や瓦、木製品が出土した。出土土器は、土師器杯A・C、皿、高杯、鉢、甕、鍋、須恵器杯A・B、杯B蓋、平瓶、長頸壺、甕などがある。時期は7世紀後半から藤原宮期。井戸底から出土した近江産長胴甕は、籠にくるまれた痕跡をとどめていた。釣瓶として用いたのだろう。

掘立柱東西堀SA9331は、柱間1.8~2.1mあり、6間分を検出した。

掘立柱建物SB9333は、北で西に振れる方位をもち、条坊施工以前の建物。桁行4間(総長8.8m)、梁行3間(総長4.6m)。SB9333の西方にある斜行溝SD9334も、建

物とほぼ似た時期。また、東二坊坊間路SF6030と重複する斜行溝SD9340・SD9341も、条坊施工以前の7世紀代の溝。

このほか、鎌倉時代(おもに13世紀)の石組井戸3基や土坑、溝、古墳時代の溝などを検出した。

石組井戸SE9328は、掘形上面の直径2.8×2.5mあり、底から高1.2mほどは川原石を円形に積んだ石組みが残っていた。検出面から井戸底までは1.9mある。瓦器などの土器類と木製品が出土した。13世紀後半。

六条大路に重複する位置には、石組井戸SE9345とSE9346がある。石組井戸SE9345は、掘形直径1.8mあり、井戸底に直径42cm、高40cmの曲物を据えて、その上に川原石を円形に積み上げる。13世紀後半の土器・木製品のほか、埋土上層から石鍋1点が出土した。石組井戸SE9346は、一辺2mほどの方形の掘形をもつ。やはり13世紀後半の土器が出土した。

このほか、調査区西南隅に、一辺2mの方形土坑SK9326とSK9327がある。時期は13世紀後半だが、井戸SE9328よりはやや古い。

古墳時代の溝は、六条大路北側溝SD2915と重複する位置に2条あった。5世紀後半の土器が出土した。

北トレンチ 北トレンチは、高所寺池北堤の中央やや東寄りに設定した。この位置は藤原宮内で、南面大垣想定位置から北に約50m、宮内先行条坊六条条間路南側溝の想定位置にあたる。調査の結果、条坊側溝は確認しえなかったが、柱穴4つを検出した。うち、3つは東西に約3mと2.4m間隔でならび、西端の柱穴の北1.8mのところにもう1つの柱穴がある。汀線の外側での遺構検出面は、標高76.15mだった。

西トレンチ 西Ⅰトレンチは、藤原宮南面大垣の内濠想定位置に近接する。東西溝を2条検出した。北側の溝は溝幅が1mを越え、深さ0.6m。南側の溝は幅約1m、深さ0.3m。遺構検出面の標高は75.8m。

西Ⅱトレンチは藤原宮南面外濠に近接し、西Ⅲトレンチは左京七条二坊西北坪にあたる。両トレンチとも顕著な遺構は認められなかったが、堤に近い部分では、遺構面と包含層が残存していた。西Ⅱトレンチでは、遺構面に炭混じりの褐灰色砂質土が堆積し、ここから7世紀代の土器が出土した。遺構検出面の標高は、西Ⅱトレンチが76.0m、西Ⅲトレンチが77.0mだった。(花谷 浩)



東二坊間路と両側溝 (北東から)



井戸SE9330 (北東から)



掘立柱建物SB9333 (北西から)

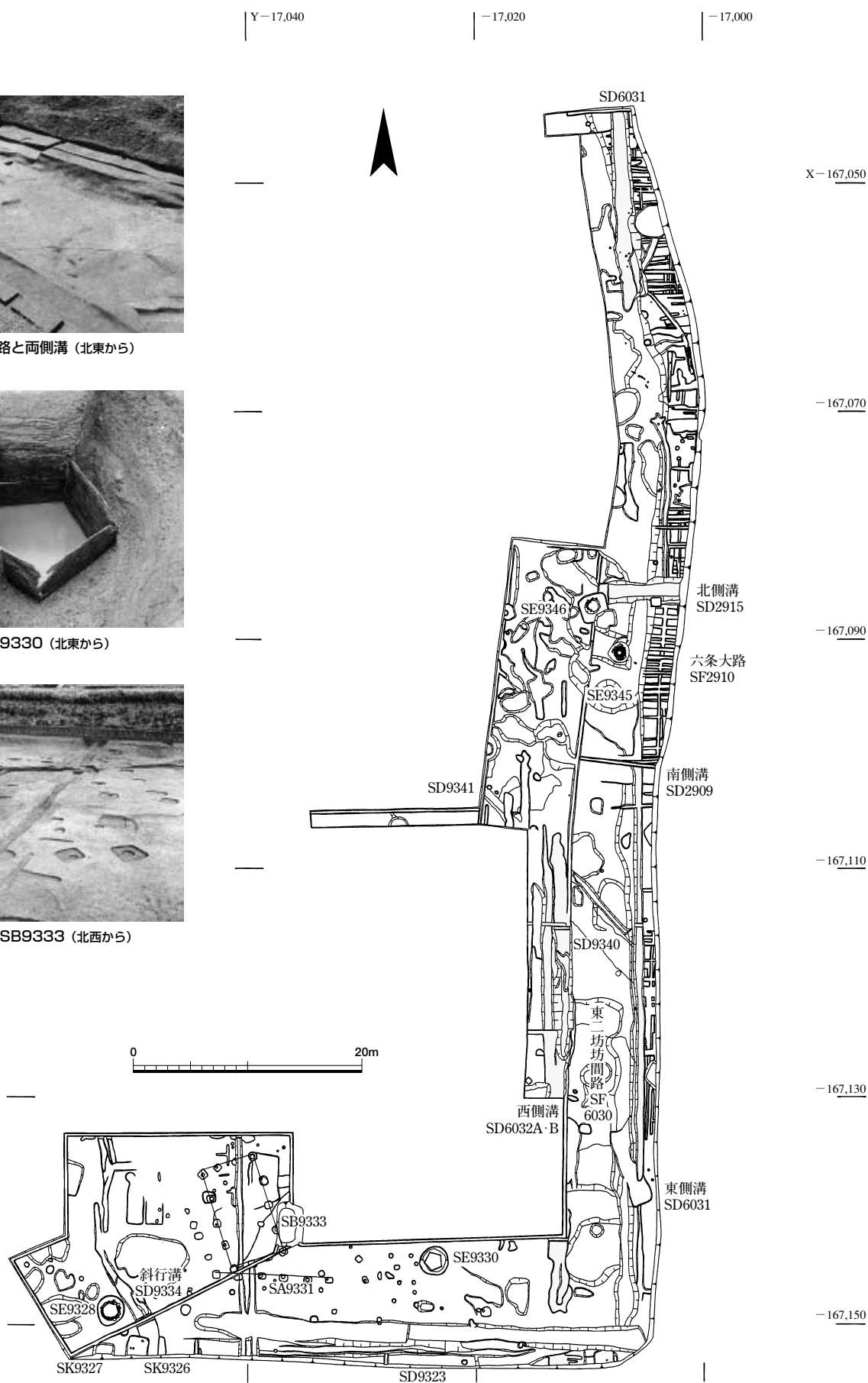


図77 第113次調査 主調査区遺構図 1:500

3 出土遺物

土器、瓦類、木製品、石製品などが出土した。

土 器 縄文土器、弥生土器、古墳時代以降の須恵器・土師器、瓦器などがあり、ほかに円面硯、転用硯(須恵器蓋)、漆壺・漆皿、トリベ、埴輪などが少量ある。

注目すべき土器に、「大鳥評」の窠書をもつ須恵器杯B蓋がある(図78)。東二坊坊間路西側溝SD6032B出土。口径16.4cm(かえり部径14.1cm)。分厚い頂部中央に比較的大きなつまみがつき、丸味のある口縁端部近くに、太めのかえりを付す。頂部外面には透明な淡緑色の自然釉がかかる。微砂と黒色粒子をわずかに含み、外表は白色、素地は灰色を呈する。

須恵器の窠書文字には「三野国加々ム評」「尾山寸(尾張国山村里)」「岡本(尾張国岡本里)」など、須恵器生産地の地名の例が多く、それによって飛鳥地域では美濃・尾北・猿投窯の製品が特定されている。

「大鳥評」は河内国大鳥郡の大宝令以前の表記で、「陶邑古窯址群」の大半が大鳥郡に含まれることから、この蓋もその製品とみて間違いあるまい。土器は飛鳥Ⅳ、陶邑古窯址群の型式編年ではⅢ型式3段階に属する。土器の特徴は、平城宮土器の胎土による群別で陶邑窯とされているⅠ群・Ⅱ群のいずれとも異なり、陶邑窯における地区・支群あるいは窯址の特定は今後の課題である。

なお、藤原京内(左京九条四坊・第60-17次調査)出土の飛鳥Ⅴの須恵器蓋に、窠書「日下部」がある。青灰色で白砂・黒色粒子を含む土器の特徴は、陶邑窯の光明池地区の製品とされる平城宮土器のⅡ群に類似する。したがって、窠書「日下部」は「大鳥郡日下部里」をさした可能性がある。(西口壽生)

瓦 類 軒丸瓦2点、軒平瓦6点、道具瓦1点のほか、丸瓦103点(14.4kg)と平瓦610点(105.6kg)が出土した。

軒丸瓦は、藤原宮所用6273Bと近世以降の巴紋軒丸瓦が1点ずつある。軒平瓦は、藤原宮所用6641Eと近世の橘唐草紋軒平瓦1点ずつのほか、小山廃寺の三重弧紋軒平瓦3点と四重弧紋軒平瓦らしき断片が1点ある。道具瓦には、隅木蓋瓦とおぼしき破片がある。

丸瓦と平瓦は、六条大路以北と以南では様相が違う。六条大路より北、つまり外周帯を含んで宮域にあたる範囲では、粘土紐巻き付け技法を主とする藤原宮所用瓦が

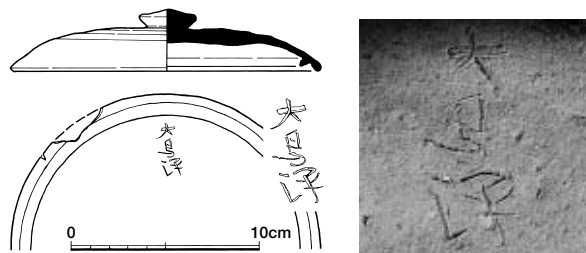


図78 「大鳥評」窠書土器 1:4 (写真は原寸大)

主体を占める。

これに対して、六条大路以南の地区では、凸面布目平瓦(約50点出土)や行基式丸瓦など、調査地の南方およそ200mに位置する小山廃寺(紀寺跡、明日香村小山ほか)の瓦が大半を占めた。

木製品 およそ20点の木製品や植物遺物が出土した。7世紀後半の井戸SE9330は、井戸底からヒョウタンが出土した。13世紀後半の井戸SE9328からは、曲物と柄杓のほか、独楽の未製品が出土し、井戸SE9345からは櫛が出土した。

石製品 鎌倉時代の石鍋のほか、弥生時代のサヌカイト製石器や剥片がある。井戸SE9345出土の滑石製石鍋は、鰐付きの浅い鍋で、口径23cm、鰐の径25cm、高さ8.3cm、重量2.47kgある。鰐は、5カ所に挟りをいれて花形につくる。底部に補修痕跡があり、補修材にも煤が付着するので、補修後も使用されたようだ。

土製品 輪羽口2点のほか、炉壁が出土した。

4 まとめ

所期の目的どおり、六条大路および東二坊坊間路を検出した。六条大路の側溝心々間距離については、21m説(井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』奈文研1984年)と16m説(黒崎直「藤原京六条大路の幅員について」『年報1996』1997年)があり、意見が分かれていた。今回えられた側溝心々間距離16.2mという成果は、後者を補強するものといえよう。また、東二坊坊間路は、これまで側溝心々間で6.5~7.1mの規模が確認されていた。今回もそれと大きな齟齬はない。交差点部分では中世の耕作溝が重複していたため、南側溝と東側溝との接続の仕方はわからなかった。

高所寺池内は、現在の汀線付近から内側では遺構面が大きく削平されているが、汀から堤にかけては柱穴など各種の遺構が残っており、遺構の残存状況は良好だった。また、十分な調査はできなかったが、弥生時代や古墳時代の遺物も多量に出土しており、この地域の地形と居住域の変遷を理解するのに重要な地区と考える。今後の調査が大いに期待できる。(花谷 浩)